

Fangé, Augustin. *Memoires pour servir à l'histoire de la barbe de l'homme*. Liège, Jean-François Broncart, 1774. 317p. 19.8×11.2cm <383. 56-F>

Hiler p. 304

1774年、ベルギーのリエージュで刊行された〈ひげ〉についての報告書である。

序文では、本書の目的について、ひげの歴史を明らかにすることは単なる好奇心を満たすだけでなく、人間そのものの歴史の一側面を知る上で大変興味深いと述べているが、古来、男性にとって最も身近だったひげは、各時代、各地域・民族において、多種多様な変化がみられる。モラルや習慣、流行や趣向の違いは時としては奇異なまでの変化形を生んでいる。

アッシリア人は、その長いひげで知られているが、彼らはひげにウェーブをかけ、あるいは輪通しして束ねたり、香水をふりかけて常に手入れを怠らなかったといわれる。これに対して古代エジプト人は、きれいにそるのが普通であった。また、プルタニウスは、兵士たちにひげをそることを義務づけたのは、アレキサンドル大王が最初であったと記している。多くのアラブ世界では、今日でもそうであるように、ヨーロッパでも、概して、ひげは〈尊敬〉、〈神聖〉、〈権威〉などと深くかかわる場合が多かった。すなわち、支配者、聖職者、哲学者、法律家などの多くは、ひげのイメージと容易に結びつくのはこのためであろう。

本文は10章から構成され、第1章はひげの語義・語源から説きおこし、次いで体毛との差異、古代エジプト・ギリシャから、本書が書かれた当時のフランスに至るひげの歴史、そして、ヨーロッパ、中近東、中国、インドにおよぶ、地域的にみたひげの考察へと続く。さらには、精神面——哲学、宗教、あるいは儀式とひげのかかわり合いについて触れ、ことわざの中で捉えられたひげを取り上げる。そして、最後に聖職者とひげの関係で結んでいる。

さらに、中世以来、ひげについて書かれた主要な12の研究書についての著者の批判を混じえた解説も、大変興味深い。(深井)